

各地に多くの美術館や博物館が開設され、地方にいても、いつでもすぐれた美術作品の実物に接することができるようになった。休日や美術館で親子連れの姿を見ることが珍しくない。近年では、夏休みなどに子どもたち向けに工夫した展示や講座を行う美術館も少なくない。これに加えて、学校週五日制

「美術館・博物館と学校教育との連携」という問題については、様々な視点からの論考が可能であろうが、ここでは筆者の周囲で日常的に起こる事例を例に、現時点における問題を紹介することとした。

筆者の勤務先は、人口十数万人という小さな都市にある県立美術館である。当館では、

博物館・美術館をめぐる最近の話題②

横たわる多くの困難  
— 学校と美術館との連携



三重県立美術館学芸課長  
毛利伊知郎

所蔵品展示の他、大小とりまぜ年間一〇回弱の企画展を開催している。映像機器のコーナーは館内に設置されているが、創作室などの設備はなく、展示活動を主体として活動するきわめてオーソドックスな性格の美術館である。ところで、当館でも学校の児童生徒の来館は少なくない。特に春秋の遠足シーズンには、ほとんど毎日複数の学校が訪れることになる。美術館と学校との関係で、最も顕著な現象は、この遠足での美術館見学である。

美術館への遠足は、善くも悪しくも、現在の日本における美術館と学校との関係を象徴している。そこには、これから美術館や博物館が積極的に学校教育と連携していく上で様々な問題が集約されているのだ。

美術館への遠足に関する問題をあげてみよう。学年単位で来館するとして、一学年一〇〇名以上の生徒が一度に、しかも限られた短い見学時間内で、本館に美術鑑賞ができるのかという問題がまずある。

引率教員の事前指導が適切でないと、展示室に子どもたちの騒ぎ声が響きわたることになる。また、子どもたちを一列に並ばせて、作品の前に立ち止まらせることなく、ひたすら歩かせるという勘違いな先生も稀に見られる。本来の美術鑑賞ならば、時間に制限されることなく、気の向くままに作品の前を行きつ

である。こうした大きな変化の中で、日本の美術教育も変わらざるをえないだろう。学校教育の制度上の制約は大きく厳しいかもしれないが、美術館の存在も視野に入れた、鑑賞にも比重をおいた新しい美術教育がもっと試みられてよいのではなからうか。

そのためには、学校の先生たちにもっと美術館や博物館に親しんでほしいと思う。遠足で美術館を訪れても、引率の先生が美術館に親しみを持っている学校の子どもたちは、そうでない先生に引率された子どもたちと比較すると、多くの点でその差は明らかである。

一方、日本の美術館にも、学校教育との連携を進める上で様々な問題がある。第一の問題は、専門職員の不足である。近年、日本の美術館では、美術館教育の重視が叫ばれている。しかし、学校教育との連携を進める上で最も必要な美術館教育の専門家が配属されている美術館は、わずかである。

当館でも、大部分の学芸員は美術史を専攻する者である。学生時代に美術館教育についての専門教育を受けた者はいない。教職出身者一名が、美術館教育に関心を持って孤軍奮闘しているというのが実状である。鑑賞に限定的でも、一名のスタッフの手でできることはごくわずかである。

これは、当館だけのことではないだろう。

戻りつというのが理想であろう。しかし、遠足での見学に、こうした美術鑑賞本来の姿を要求することには、非常に困難がある。もちろん、子どもたちの心こもった感想文を後日送ってくれる学校の中にはあるので、遠足による美術館見学の効果を全面否定はできないけれども、多くの問題があることに変わりはない。

では、遠足以外で学校から美術館を訪れる



子どもたちの真剣なまなざしに応えるためには……

他の美術館も似たような状況であろう。日本各地の美術館で行われている教育活動は、こうしたごく少数の学芸員の個人的な努力によるところが大きい。

当館では、所蔵品や企画展ごとに配布するワークシートを、学校の先生方の協力を得て作成している。これは、美術館と学校とが継続した関係を保つという点で、また先生たちに美術館の現状を認識していただける点で、それなりに意味はあると思われる。

しかし、彼らと美術館教育には素人であり、理論面、実際面で当然限界はある。しかも、これは美術館と学校との組織的に整備された協力関係ではなく、個人レベルの関係にとどまっている。

現在以上に活動の拡大を考えたとき、どのような方策があるのか。限られた予算と人員では、現在以上の活動は不可能である。抜本的には専門職員の増員しか道はないだろう。

それとも、学校教員や教員経験者の配属という安易な方法をとらず、美術館教育についての専門的な研究を積み、美術館や地域の学校の特性に応じてフレキシブルに対応できる複数のスタッフを確保し、美術館が学校に積極的に働きかけていく体制づくりをすることが、長期的にはより充実した美術館と学校との連携につながるのではなからうか。